

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：82705

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04859

研究課題名(和文) 吃音のある子どものレジリエンスの向上に関する教育支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of an Educational Support Program on Improving the Resilience of Children with Stuttering

研究代表者

牧野 泰美 (Makino, Yasumi)

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・研修事業部・上席総括研究員

研究者番号：80249945

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、吃音のある子どものレジリエンス(精神的回復力、立ち直る力)とその向上に関する知見として、レジリエンスは、人間関係、主体性、ユーモア、創造性、コミュニケーション等により構築されること、吃音問題との関連としては、折り合い、仲間、客観視、気持ちの解放、笑い、感情の対処、他者信頼等が重要な要素であること、子ども自身が吃音を対象化できること等の重要性が整理された。上記の観点を踏まえた指導・支援として、子どもと教師が対等に対話を進め、吃音について語る実践内容・方法を検討・提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

吃音の原因は未解明であり、確実な改善方法が確立されていない中では、治療を目的とした研究ばかりでなく、症状の改善が困難な場合も見据えて、吃音を抱えながらもいかに暮らしにくさを払拭していくかといった観点からの研究も重要な意味を持つ。

本研究は、吃音のある子どもが、日常生活の中で精神的に落ち込んだとしても、回復力、立ち直り力、すなわちレジリエンスによって対応できると考えられることから、吃音のある子どものレジリエンスを高めるための視点と指導・支援の在り方を検討・整理し、教育実践に資するものである。

研究成果の概要(英文)：The present study provides findings on improving resilience in children with stuttering. Resilience is comprised of relationships, initiative, humor, creativity, communication, etc.. To improve resilience in children with stuttering, compromise, friends, objectivity, and their feelings of release, laughter, emotional control, and trust in others are important. Furthermore, it is important for children to be able to objectify their own stuttering.

In this study, we proposed a practical content and method for children and teachers to talk about stuttering.

研究分野：言語障害教育

キーワード：吃音 レジリエンス 自己肯定感 通級指導教室 ことばの教室 指導内容 指導方法 言語障害教育

1. 研究開始当初の背景

吃音のある子どもが、自己の吃音に翻弄され続けず、吃音と上手く向き合い、自己肯定感を育んでいくためには、個々の状況に応じて、自らの吃音や自己について学び、理解していくことが重要であり、研究代表者らは、これまで、そのための指導・支援の内容・方法や、保護者支援の在り方、教員と保護者が共に取り組める活動の開発に取り組んできた(牧野, 2011, 渡邊・牧野, 2012, 他)。

上記の研究活動を通して、吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために、子どもが吃音や自己について学び、知るだけでなく、レジリエンス(精神的な回復力、立ち直る力)を高めることの重要性が示唆された。吃音があることによって日常生活において、周囲との関係やコミュニケーションにおいて起こりうる困難を考えたとき、精神的な傷や落ち込みに対する回復力、すなわちレジリエンスの育ちが重要な意味をもつ。近年、このレジリエンスは、臨床心理学や精神医学の分野でも着目されてきているが、吃音のある子どもへの指導・支援においてレジリエンスを高めるためのアプローチは整理されていない。

したがって、吃音のある子どもへの指導・支援の在り方を検討するに当たり、本研究では、吃音のある子どものレジリエンスに焦点を当てる。

2. 研究の目的

本研究は、吃音のある子どものレジリエンスに焦点を当て、吃音のある子どもへの指導・支援の在り方を検討する。本研究の目的は、臨床心理学や精神医学における研究成果、及びこれまでの吃音に関する研究成果を踏まえ、吃音のある子どもにとってのレジリエンスを構成する要素を整理し、吃音のある子どものレジリエンスを高めるための指導・支援の内容・方法を開発することである。

3. 研究の方法

本研究は、文献研究、ことばの教室担当教師及び成人吃音者からの資料収集、及びことばの教室における実践収集・検討・整理により進める。

(1) 文献研究

主として、臨床心理学、精神医学、吃音に係る教育・臨床の各領域の文献を収集・整理し、レジリエンスとその向上に関する知見、吃音のある子どものレジリエンスとその向上に関する知見、吃音のある子どもへの指導・支援に関する知見を整理する。

(2) ことばの教室担当教師及び成人吃音者からの資料収集

主として吃音のある子どものレジリエンスに関係すると考えられる事項、レジリエンスの向上につながると考えられる事項・取組を中心に、ことばの教室担当教師及び成人吃音者から資料収集、情報収集を行う。具体的には吃音のある子どものレジリエンスを高めるために必要と考えられる要素、取組等について、これまでの実践や経験等を踏まえ、ことばの教室担当教師、成人吃音者から資料・情報を収集する。

(3) ことばの教室における実践収集・検討・整理

上記を通して整理された、吃音のある子どものレジリエンスを高める実践に関して、ことばの教室における実践的検討を行うとともに、具体例を収集・整理する。

4. 研究成果

文献研究、資料収集、実践検討を通して、レジリエンスとその向上の視点、吃音のある子どものレジリエンスの向上とその具体的実践について、以下の通り整理できた。

(1) レジリエンスに影響を与える要因

- ・レジリエンスには、家族、学校、地域等の環境要因が影響する。
- ・レジリエンスには、状況に対処する力等の個人の持つ要因が影響する。

(2) レジリエンスを構成する要素

- ・レジリエンスは、自分の問題の気づき、人間関係、自らの主体性、ユーモア、創造性、コミュニケーション、希望、繋がり等の要素により構築される。

(3) 吃音問題とレジリエンス

- ・吃音があるために抱えている問題がある場合、問題の所在の理解、折り合い、認め合う仲間、目的意識、客観視、気持ちの解放、笑い、感情の対処、他者信頼等が、レジリエンスを向上させる重要な要素となる。

(4) 吃音のある子どものレジリエンスを高める視点

- ・子ども自身が、自分の吃音を、あるいは、吃音のある自分を対象化して捉えることが重要

である。

- ・子どもが、自分自身について、自分の吃音について説明できるような力を付けることが重要である。また、そのための「自分研究」が重要である。
- ・吃音の症状が改善するのかわかりの見通しがなくても、その曖昧さを受け入れることが重要である。
- ・失敗したときの精神的な落ち込みを引きずらないための方策、否定的な意味合いのことばを肯定的に受け止めるための方策を考えることが重要である。
- ・上記の事項を意識したことばの教室等での教育実践が重要となる。この実践においては子どもと教員の「対話」が重要であり、対話には「対等性」が不可欠である。

(5) 具体的な実践内容・方法

上記のレジリエンスの向上の視点を踏まえ、具体的な実践の内容・方法について検討し、実際にことばの教室において実践を重ね考察した。その結果、以下の実践が整理された。

吃音の描写・擬人化・キャラクター化の試み

吃音が見えるものとしたら、どんなもの、生き物、キャラクターなのかを子どもが想像し、その特徴について、子どもと教師が対話を深めていく実践である。

この実践は、吃音について語ることが難しい子どもでも、キャラクターについては考え、語ることができ、吃音と向き合うことにつながっていくという利点がある。そして、キャラクターについて語り合うことは、吃音について、嫌で困ったことという捉え方をしている子どもにも、「おもしろい」という感覚を生じさせ、レジリエンスの向上につなげることができる。

実際の教師の語りかけとしては、

- ・吃音が見えるとしたらどんな形で、どんな色をしているだろう？
- ・目や口や鼻はあるだろうか？
- ・名前を付けるとしたら、どんな名前にする？
- ・そのキャラクターはどんなときに出てくるだろう？
- ・そのキャラクターはどうやって（あなたを）どもらせるの？
- ・そのキャラクターの好きなもの、嫌いなものは何だろう？
- ・そのキャラクターの好きなことば、嫌いなことばは、どんなことばだろう？
- ・そのキャラクターに何か言いたいことはある？
- ・そのキャラクターはいなくなっほしい？

等である。こうした語りかけから、対話を進め、考えを深めていくことが可能である。

吃音をめぐる出来事や気持ちの言語化の試み

吃音をめぐる日常生活（学校生活等）における出来事や気持ちを短い文（詩、川柳など）にして、教師や仲間と語り合う実践である。

この実践では、とりわけ、カルタの読み札として作成する方法が、子どもにとっては取り組みやすい活動であった。作成した読み札を活用して、カルタ遊びができることもこの活動の特徴である。

自分の気持ちや体験を文字にする、仲間と気持ちや体験を共有することが、吃音に対する「気持ちの余裕」、「ユーモア」、「創造性」を生み、レジリエンスの向上につなげることができる。

吃音の状態を図示する試み

子どもに、自分自身の吃音の状況（吃音の頻度・重症度）、自分の吃音に対する周囲の人の状況（周囲の理解、受容）、自分自身の気持ち（吃音に対する気持ち）をそれぞれ1から10までの数値で評価させる。自分自身の吃音の状況の場合、1が最も症状が軽く、10が最も重い、自分の吃音に対する周囲の人の状況の場合、1が最も理解・受容されていると感じる状況で、10が最も理解・受容されていないと感じる状況、自分自身の気持ちの場合、1が最も吃音が気にならない状況で、10が最も気になる状況、として評価する。

同心円上に3点をプロットし、線を結んでできあがった三角形の大きさ、形により、今の自分自身の吃音の状況を「客観視」することができ、レジリエンスの向上につなげることができる。また、他の仲間と比べて、その特徴を語り合うこともできる。

以上の実践は、子どもが吃音を対象化できること、教師との対等な対話を可能にするこの二つの観点から有効と考えられた。

<引用文献>

- 牧野泰美（編著） 吃音を知る・学ぶ、自分を知る・学ぶための手がかり - 吃音、そして自分自身と向き合うために - . 科学研究費研究成果報告書（課題番号：20530900）, 2011 .
渡邊美穂・牧野泰美 自分と向き合う子どもの育成 - ことばの教室における吃音のある子どもとの学習を通して - . 国立特別支援教育総合研究所ジャーナル, 創刊号, 10-15 . 2012 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 村瀬忍・牧野泰美・築山道代・篠原美喜
2. 発表標題 日本における吃音のある子どもへの教師による指導・支援の重要性
3. 学会等名 吃音・クラタリング世界合同会議 in japan 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>・牧野泰美 吃音のある子どもへの指導・支援を考える - 共感性（関係性）・自己性とレジリエンス - . 「第5回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」資料 . 9-10, 2016年8月 .</p> <p>・牧野泰美 ことばの教室の実践を基にした<対話>を巡る考察 - 対話と、共感性（関係性）、自己性、レジリエンス - . 「第6回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」資料 . 11-13, 2017年7月 .</p> <p>・牧野泰美 子どもとの関わりにおける「対話」への期待、「対話」の可能性 - 子どもとの「対話」における関わり手（親・教師・言語聴覚士）の役割 - . 「第7回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」資料 . 7-10, 2018年7月 .</p> <p>・牧野泰美 「対話」のもつ可能性 . 「第8回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」資料 . 13-16, 2019年8月 .</p>

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----